《論文》

神の國は斯くのごとき者の國なり
―公立小学校教員としての歩み（その 1）―

佐々木　正

Ⅰ　教育実習からのスタート

教師のスタートを切った学校は東京都北区のＮ小学校でした。この学校は私が教育実習を行った学校です。立教大学 4 年次の 1974 年 5 月後半から開始された教育実習は私にとって教師としてのスタートではなかったかと思えるほど、強烈な印象を受けた学校でした。そのＮ小学校への着任が告げられたときには大変驚きました。1ヶ月に満たない期間とはいえ、教育実習をした学校に着任できたことは何ものにも代え難い安心感がありました。教育実習後も行事などに参加させていただいていました。そんな時に成長していく子どもたちと出会うことはとてもうれしいことでした。それほどまで心が引かれた教育実習で私は三つの大きな宝物をいただきました。

1　子どもの姿

一つ目は子どもたち一人ひとりの姿でした。子どもたちの考える姿、考える道筋、興味の有り様など一つ一つが全く異なるものであることに深く気づかされました。小学校教育に関してはだれでも自分自身の受けてきた経験が土台となるものの、自分の受けた教育を客観的に振り返ることはなかなかできません。そこで学問としての教育学の学びが不可欠となります。立教大学での学びは、大変大きな満足感が得られることばかりで、どの先生からもその中心が人間について深く捉えることにあると教えていただきました。大学で学んだ『一人ひとりは違う』ということを、このＮ小学

校の実習で深く理解できました。今振り返ってみるとその土台はN小学校の教師一人ひとりの指導力の高さと同僚に対する尊敬と信頼感の深さによるものであったと思います。そのような教師集団の中で育つ子どもたちは自由な発想を認められ授業中も生き生きとしていました。一つの解答を見つけ出すような学習だけでなく、自由な発想、書くことを大事にしていた学校全体の学びの質は高く、子どもたちののびのびとした作文にはいつも驚かされました。私のつたない授業にもなんとか協力して盛り上げようとする姿が垣間見られ申し訳なく思った気持ちは今でも忘れられません。一日約8時間を共に生活することで得られたことは、話し方、受け止め方、わからないときの表現の仕方など、子ども一人ひとりの表現はすべて個性的である、という事実でした。

2　A先生との出会い

二つ目は教育実習の指導教諭であるA先生というベテラン男性教師との出会いでした。A先生は6年1組の担任で学年主任という重責を担われていました。通常、教育実習生の指導を6年の担任に依頼することは稀なことなのですが、私はこの学級で教師として様々なことを学ばせていただくことになりました。今までに目標とする多くの先生と出会いましたが、このA先生こそ現在に至るまで、その姿に近づきたいと思い続けている最初の先生でした。朝礼での着任挨拶から始まり、あっという間に過ぎた一日目、A先生は指導日誌に「～学校内に一日いるだけで相当気疲れするものです。～」と書いてくださいました。当時21歳の私には何気ない励ましの言葉ともとれましたが、学校を外から見ただけでは決して出てこない言葉として今は心に刻んでいます。教科書を中心に指導する内容は決められていますし、1時間1時間の進度も年間計画、月毎の計画、週毎の計画の中でほぼ決まってきます。子どもたちの評価もいわゆるペーパーテストの得点で行うならば、そう複雑なことではありません。しかし、いったん一人の子どもをよく見つめてその成長に教師としての責任を持とうと考えた

瞬間、あらゆる気遣いが必要になってきます。単なる人間同士のつきあいであれば、いやになれば離れることができます。しかし、教育という名の営みでは、学校でも、家庭でもそれは許されません。実習初日の日誌に私は「自らの教育に対する受け止め方の浅薄さを感じさせられた。」と記しました。それだけ、A先生の授業はきめ細かな対応に満ちていたからです。どの教科でも、考える時間とノートなどに書き留める時間が保証され授業の終了とともに、学んだという達成感の得られるものでした。そんな先生だからこそ「気疲れするものです。」と書いてくださったのでしょう。当時どれだけ言葉でまとめられたかは覚えていませんが、直感的にすごい先生に巡り会えたと思いました。このことは今でも忘れられない思い出として心に残っています。

子どもたちとの生活も時間が経過し、授業参観が中心の第一週から、二週目に入り授業の実習が始まりました。それまでの参観とは大違いで子どもたちの前に立って45分間の授業を一人で進めていくことが、実に責任の重いことであると思い知らされました。一人ひとりの子どもたちの理解の仕方や、表現の仕方を第一週目にある程度理解したつもりでも、授業の中で一人ひとりに応じながら進めていくことは容易なことではありません。子どもたちから質問があれば、その回答を丁寧にと思うだけで、全体の流れ、時間の配分などは頭から飛んでしまいます。できるだけ一人ひとりにわかりやすく答えよう、ノートに書く機会を増やそうと考えてはみましたが、書くことにかかる時間は個人差の大きいものでした。A先生はそんな私の未熟な指導を一つ一つ丁寧にそしてわずかでもよいところを見つけ指摘してくださいました。同時に、現場の経験から練り上げられたご自身の信念を伝えていただきこれが私の教師としての基となりました。

3　クリスチャン教師として

三つ目は教育実習の指導担当となってくださった上田薫教授の言葉との出会いです。

実習も進み研究授業の日を迎えることとなり、大学からの指導担当としてお見えになったのが上田薫教授でした。結果はさんざんでした。普段の授業でも感じていたことでしたが、いつも以上に子どもの思考、理解の仕方、学習への意欲などを取り上げる余裕がなくなり、ひたすら長い時間をかけて準備してきた指導計画をこなしていくだけになってしまいました。資料も準備して子どもの考えを引き出そうとしましたが、結局私の講義中心の授業に変わりはありませんでした。子どもたちとともに過ごす時間も増え、授業の機会も日に日に増えていく中で、参観者も多い研究授業で今までの成果をなんとか示したい、認められたいという思いばかりが強くあったのかもしれません。授業後の協議会ではA先生を始め様々な先生方から励ましやご指導をいただき有り難さとともに、こんな授業をしてしまってと申し訳なさの混ざった複雑な気持ちでいました。上田先生からもたくさんの励ましの言葉をいただきました。その中で「講義調の授業は往々にして子どもたちが無理矢理教え込まれ、追い込まれているように思われますが、じつは、教師自身が追い込まれている結果なのです。」と話されました。今から40年以上前のことになりますが、なぜか今でもこの言葉は脳裏に焼き付いています。研究授業の際の教師として子どもたちの前に立ち、教材、資料がある中で私は追い込まれているという上田先生の言葉がぴったりの状況だったと深く頷きました。

やがて、実習全期間を無事に終え教育実習レポートも書き終えた後、上田先生から次のような言葉をいただきました。「教育というものの中には人間の奥行きがひそめられているということに気づいてもらえたと思います。人間理解を深めることがなにより大事ですね。割りきって安定してしまわぬように。ご多幸を祈ります。」生涯の仕事として小学校教師を選択し歩んでいこうと思いながらも、自分にどれだけできるだろうかとの不安も同時に抱えていた時期に、まさに指針となる言葉でした。

N小学校での教育実習における子どもたちとの出会い、A先生をはじめとした先生方との出会い、そして、上田先生との出会い、これらすべてが

現在までの私を支える土台となったかけがえのないものでした。そしてそれらが相まって、迷い出た一匹の羊をも探しに出かけることをいとわない信仰を持つ者として、教育に関わることができるかもしれないという希望を抱くことができた貴重な経験となりました。

Ⅱ　信仰と教育

1　キリスト教との出会い

(1) 中学生時代

私がキリスト教に触れたのは1966年頃、中学校2年生から3年生の時期でした。きっかけは聖書との出会いです。当時のことを正確に思い出すことは容易なことではありません。しかし、聖書を買った店のこと、新約聖書の表紙の絵柄、通読したときの感動、衝撃は自分でも驚くほど鮮明です。

私の家庭はごく普通のサラリーマンである父と母、祖父母、姉、兄の6人家族でした。キリスト教との接点は全くありません。家には仏壇があり、食事をする部屋には神棚もありましたが、その前に座らされたり話を聞かされたりしたことはありませんでした。お盆になると、なすやキュウリに楊枝を刺したお供えをし、お正月には神棚に新しいしめ縄を飾っていました。キリスト教との関連といえば小学校の時、通学路が同じ方向だった友人がカトリック教会に通っていたことや、中学生になって牧師の息子と知り合いになったことなどでしたが、特別な興味を持ったということはありませんでした。

ではなぜ聖書を買いに出かけ、通読したのか、今となってはそのときの気持ちを思い出すことはできませんが、中学生であった自分の状況をできる限り誠実に思い出してみると、それは『不安とあこがれ』からではなかったかと思うのです。

『不安』という点では成長の段階における思春期の特徴の一つだと思いますが、幼なじみばかりの小学校時代とは違い、急に複数の小学校からの出身者と学校生活を送ることは多少の緊張感が伴いました。当時私の通っ

た中学校には、隣の県からの越境入学生も何十人といる状況で高校進学に対する熱意の強い学校の一つでした。そのため生徒としてはおのずと進学を意識し続けなければなりません。そのうえ、先輩後輩の関係は現在に比べ想像できないほど厳しいものがありました。下級生のときにされていやだったことを自分が上級生になると下級生にするといった風潮が普通に残っている時代でした。だからといって問題の多い学校だったわけではありません。それがあたりまえの状況だったということかもしれませんが、私はそんな雰囲気に不信感を覚えるようになりました。

『あこがれ』というのは先ほどの『不安』の裏返しの気持ちなのだと思います。この先どう進んでいけばいいのか、いわゆる偏差値の高い高校への入学が自分にとってどれほどの大きな価値があるのかわかりませんでした。何になりたいという夢はまだないのに、進学はあのくらいの学校へと希望していることが、変に思えてきたのです。小学校時代の友達はたくさんいました。私の通った小学校からは100％、同じ中学校に進学したからです。6年間一緒だった仲間とは中学に入学してもお互いの気持ちは変わりません。一人ひとりの個性は子どもなりに理解し合っていましたし、優しさ、朗らかさ、器用さ等もそれぞれの持ち味であると考えていました。その中でたった一つ抜けていた視点は成績というものでした。一緒によく遊んでいた仲間をだれも成績で評価するなどといったことはありませんでした。しかし、テストの点数という新しい尺度が導入されると、一人ひとり違う進路をとらざるを得ない状況におかれます。そんな状況から来る不安感を抱いたままの生活を送っていました。そんなときにある映画と出会いました。細かなところまでは記憶に残っていないのですが、ある場面だけが昨日見た映画のように思い出されます。それは、暴力で領土を拡大しようと進む人々とキリスト教の聖職者を先頭にした人々との対峙の場面です。何か目に見えないことを信じる人々の雄々しさは、今まで経験したことのない偉大な姿として映りました。見かけはごく普通でありながら、何者をも恐れない姿に感動しました。その場面の映像は今でも私の心に残っ

ています。

(2) 聖書の真実

とにかく最も廉価な文庫本サイズの新約聖書を購入して読み始めました。読み通すのに何日かかったかなどはっきりと覚えてはいません。ただ、読み終えたときに私はここに書かれていることは信用できる、と思えたことは確かです。クリスチャンという言い方が聖書の言葉を信用できると自覚したときということであれば、私は初めて新約聖書を読んだときにクリスチャンになったと思えるほどこの特別な本との出会いは衝撃的なものでした。意味が全て十分に理解できたはずではないと思うのですが、私がこの本は特別だと感じた理由は二つありました。

一つは、自分たちの信仰にマイナスになると思われる内容がそのまま記されていたことへの驚きでした。信仰が薄いとイエスさまにしかられる使徒たち、鶏が三度鳴く前のペテロの裏切り、殉教者ステパノの事件、パウロの手紙に書かれた教会内部の分裂、教会に集う人々の過ち、人の心の内部に潜む邪心など、これでもかというほど書かれていることに正直びっくりしました。読み始める前は道徳の本のように教訓めいた話の集まりで、取っつきにくいのではないかとの思いもありました。しかし、人としての弱さを浮き彫りにした話はそのどれもが自分の心の内にもあるものであると気づくと、やすらぎを得ながら先を読むことができる不思議な本でした。自分の弱さ、決して今のままでいいなどとは思えないのに、変わることはできない現実に当時の私は気づかされました。さらに友人から文学の面白さを紹介されてからは様々な本を読みあさりました。それは常に頭を離れない高校受験から一時でも逃れられる時間でした。というより、単純に文学の面白さに捉えられたといった方が正しかったと思います。これらの文学を通して人の心は複雑であり、容易には理解できないことを教えられました。その中でも聖書は真実の文学であるように思われました。

二つ目はそれまで身につけてきた価値観とは異なる世界があることの安

心感でした。当時の私が求められていた価値観は一言で言えば勝つことでした。学校の中でも勝つことで得られる価値がすべてというものでした。学習は点数で、進学は偏差値で勝つことによって自分の価値が認められる、そんな状況でした。いつしか、その人が持つよさを大切にし、決して成績で評価などしてはいなかった小学校時代の友達関係がどんどん小さくなっていくようで寂しさを感じるようになりました。小さな抵抗として、運動会前に練習と称して夕食後みんなで通っていた小学校の校庭に集まり短距離走の練習などをしていたこともあります。点数という評価のない懐かしさの中での楽しい一時でした。そんな状況の中で、聖書には当時の私に求められていた価値とは全く正反対の価値が提示されていたのです。「私が来たのは罪人のためです。」「だれでも幼子のようにならなければ天国に入ることはできません。」とのイエスさまの言葉。「私は罪人の頭です。」と語るパウロの言葉。イエスさまが捉えられたときに弟子であることを否定したペテロのその後の変わりよう。ここに書かれていることは、本当のことであると信じ、疑うことはありませんでした。

(3) 洗　礼

時が過ぎて高校生となりしばらくたった頃から、毎週日曜日教会探しに出かける日々が続きました。高校一年生が知り合いもなく教会の門をくぐるのは決して容易なことではありません。「どなたでも大歓迎」と書かれていても一歩足を踏み入れる勇気はなかなか生まれません。教会を電話帳で探し、地図でその場所を確かめながら毎週日曜日に自転車で出かけました。地図ではたどり着けないこともありましたし、たどり着いても入りにくく、近くをぐるぐる回りながら結局家に戻るようなことも一度や二度ではありませんでした。しかし、中学時代に聖書と出会い、自分はクリスチャンであるという思いがあったので、教会探しは決して苦にはなりませんでした。ようやく門をくぐるチャンスに恵まれ、礼拝に参加することができるようになりました。それからもいくつかの教会を訪ねた後に、高校生、

中学生が多く通っていた教会に巡り会い、そこで教会生活を始めることとなり母教会となりました。

この教会では一般の礼拝の前に小学生向きの日曜学校とは別に、一般礼拝と同じ会堂を使用して高校生、中学生による「ジュニアチャーチ」と称する礼拝が行われていました。讃美歌の伴奏も礼拝の司会も自分たちで行いました。聖書の講話はジュニアチャーチの指導を担当している神学生が行います。式次第はほぼ一般の礼拝と同じでした。当時高校生が主でしたが、中学生と合わせて 20 名ほどの参加がありました。また、週一日は高校生会が夕方教会の集会室で行われました。聖書の講解や互いの課題に対する祈り合い、讃美歌だけでなく当時流行し始めたゴスペルフォークで賛美をする集会でした。また、高校生会だけで友人を誘い合って伝道集会を行ったり、同じ教派の高校生との交わり、春、夏のバイブルキャンプなども行ったりしていました。そんな中で過ごしながら高校 3 年の春、ペンテコステの礼拝で私は洗礼を受けました。

(4) 大学入学

大学進学に関しては指導を受けていた神学生や牧師との相談を続けた結果、将来、哲学、神学を学びたいと考えるようになりました。そのために大学ではドイツ語と英語の習得を中心に学びたいと考え、キリスト教主義の立教大学ドイツ文学科に進学することとしました。中学時代から持続していた文学に対する興味も捨てがたく自分ではよい選択だと思いました。

大学入学の 1971 年は 60 年代の学生運動最盛期に比べると縮小されてきたとはいえ、未だに活動家と言われる学生は存在していました。高校時代も校門前には数枚の大きな立て看板が設置され意見発表の場になっていました。立教大学の入学時にも同様な活動は行われていました。大学生活の開始に当たりチャペルで真剣に祈ったことを鮮明に記憶しています。私の当時の所属教会は改革派信仰に近い福音派の教会でした。「主の祈り」以外は全て自由祈祷が基本で信徒はよく祈りました。高校時代までの選択の

余地がほとんどない生活から、自分で学ぶ内容を選択していく生活、遠方の出身者、10歳近く年が離れている同級生、そして、学生運動、そんな環境の中で自分に任された選択が正しく行えるのかとの思いが祈りの場へと足を運ばせたのでしょう。

当時の立教大学には木造の一般住宅のような大きさの校舎がいくつかあり、床のきしむ音の中で、授業ごとに出会う学生が異なる大学の雰囲気に居心地のよさを感じました。大学における履修科目は、現在とは違う枠組みの中で選択をするものでした。どの学びも興味深いものでした。その中でやはり将来のためにドイツ語の習得、ドイツ文学に関する学びには力が入りました。所属教会の牧師も神学校入学前は国立大学ドイツ文学科卒業とのことで、後を追っている感覚が大学での学びの原動力の一つになっていたのかもしれません。いずれにしても、文法的にも厳格なドイツ語の学びは初級の段階では自らが向上していく状況が把握しやすく、また、英語とも近しい関係にあることから熱中することができました。長期の休暇はほとんどドイツ語学習に費やしていました。

2　教師への道

(1) 教えるということ

そんな中、それまで考えていなかった、どちらかというとその職業自体に好意を持つことができなかった教師という仕事に関する出会いが様々な場面で用意されていたのです。

一つは高校生会OBとして高校生への指導補助という教会における奉仕を担ったことです。高校1年から卒業まで通ったジュニアチャーチと高校生会は私の信仰生活の学びの場でした。聖書を読み始めてから一人ひとりを支え、導く神さまへの信頼はこの時期の様々な活動を通して育まれました。また、通っていた高校の中に非公認ですが聖書研究会をつくりました。学生食堂の一隅で、教会に通う友人や、聖書に関心を持つ同級生などと放課後週に1回集まって聖書からの学びを分かち合ったり、祈り合ったり

していました。毎年のバイブルキャンプに参加し、同年代の多くの信仰の友と語り合ったり賛美したりすることで信仰の共同体の喜びを経験しました。そんな喜びを後輩に伝えたいと考えました。そこで改めて、同じ信仰を持っていても、感じ方、考え方の違う人がいることや、表現の仕方も人によって異なることを経験しました。

二つ目は家庭教師のアルバイトを始めたことです。知り合いからの依頼で大学入学後、小学生と中学生の家庭教師をすることになりました。ここでは、全く違う二人の学習者と出会う体験をしました。もちろん、教師になろうという気など全くない時期でしたので自分から積極的に家庭教師のアルバイトを探したわけではありません。けれども時間が過ぎていく中で、この二人との出会いは大変大きな意味を持つことに気づかされていきました。

小学生の子は初めて会ったときから打ち解けて、学習に対しても素直に取り組む子でした。成績優秀であることは、教科書を中心とした復習問題の解答の仕方などからすぐに分かりました。そこでこの子に何を学ばせればいいのかと考えた末、市販されていた私立中学入学程度の問題集を主として使用することにしました。問題は教科書では扱わない解決方法が必要なものや、複雑な計算問題などが含まれています。課題をやり終えた子どもに解決方法について説明して納得してもらえるのは大変うれしいものでした。しかし、時間を経るに伴い自分のしていることに対しての違和感のようなものを感じるようになりました。難しい問題の解き方を学ぶことがこの子にとってどんな役に立つのかが分からなくなったのです。私が疑問を感じている学校教育の『競争の中で勝つこと』を教えているような気がしてきたのです。

中学生の子は小学生とは対照的で明らかに学習自体に興味が持てない子でした。分からないことが分かるようになる楽しさや、高校受験突破のためにとにかく基礎的な学習を確実にしようといった目的意識なども感じられない子でした。英語を中心に教えたのですが、基礎的な事項も曖昧だったので、初歩からの段階的な学習により進歩がはっきり分かるように指導

したり、カードを自作して楽しみながらできるようになる喜びを味わえるような準備をしたりしました。しかし、結果は芳しくありません。学習時間は一応取り組んではくれるのですが、なかなか定着する様子が見受けられず、いつも同じ教材を復習する羽目になってしまいました。これでは相手も面白くないだろうなと思いつつ、私は有効な手立てを講じることができませんでした。

(2) 土曜学校

教会での奉仕は、高校生会担当から小学生の教会学校の分校として行われていた土曜学校教師へと変更しました。これは当時私の通っていた教会が日曜日に行う日曜学校だけでなく、子どもたちの集まるところで聖書の話を伝えようと行っていたもので、団地の広い遊び場の一角を使わせていただいたり、信徒の方の家を開放していただいたりして子どもたちを集めて土曜日に実施していたものです。毎回幼児から小学生高学年まで約 2 ～ 30 名が集まっての集会でした。教材や道具は全て教会から自転車やバスで会場まで運びます。慣れてくると聖書講話の分担も回ってくるようになり、幼い子どもたちへの話の準備に精力を傾けました。また、終了後子どもたちと一緒に遊ぶ時間も楽しいものでした。大学卒業まで 3 年間、この奉仕を続けました。毎週一回の子どもたちとの出会いは、教師を目指そうと決断した私にとって大変大きな学びの場となりました。子どもといっても一人ひとり全く違うこと、そしてその子なりのよさが必ず違う光を放っていることを否応なく教えられました。同じ声の合唱は美しいものですが、『一人ひとり違う声の合唱こそより美しい』という神さまの声が聞こえるようでした。その後の教師人生を貫く信念のようなものはこの時期の経験が土台となって培われてきたのかもしれないと思っています。

(3) へき地教育との出会い

そんなある日、私は分校教師の日常を記録したルポルタージュと出会い

ました。東北の山深い分校の青年教師の生活に密着した記録でした。その分校は小学生一人と担任である教師一人の分校です。普段の教室での授業風景、校庭での二人だけの体育の時間、掃除の時間になると子どもの祖母が分校にやってきて三人での掃除が始まります。美しい山間の分校の中で子ども一人と教師一人で営まれる学校教育という営みを映し出す映像に私の心は震えました。私の学校経験では、40 人を越す子どもたちと先生一人、自分はいつも全体の中のほんの一部分という思いでした。ですから自分を含めだれもが競争を強いられている環境とは全く異なる学校があることに心底驚きました。分からないことも、できないことも受け止めてもらえる。今まで学校では分からないなんて言いづらい、できないことを知られたら恥ずかしい、という雰囲気を感じていた私の経験と比べると、なんという違いなのだろうと思いました。いつかこういう仕事がしたい、という思いが強く浮かんできました。まさにこの学校は、教会のようだと思いました。一人ひとりを決して集団の中に埋没させず、不完全な姿であるからこそ、そのまま支え心配し抜いていく私の出会ったキリスト教信仰の具現化された姿との相似形に感動しました。

このように高校生会の後輩や子どもたち、へき地教育との出会いを通して、それまで曖昧だった将来の職業を教師という明確な形として示されたような気がしました。人がその一生を生きる準備として設計された学校教育の中で、「一人ひとりを対象に、どんな大人数の中の一人であっても支えられているのだという経験を与えられる、感じさせられる。」そんな気持ちを持った小学校教師になりたいと考えるようになりました。

(4) 教育学科への転科

それからは、小学校教師となるためにどうすればいいのかといろいろ調べました。当時は大都市圏の教員不足が続き、小学校教員となるための短期大学、教員養成所などが設置されていました。4 年制大学を卒業し中高の教員免許があれば、小学校教師として採用されながら短期間で小学校免

許の取れる養成所もありました。このままドイツ文学科を卒業してから、新たに免許を取るために働きながら養成所などに通うこと、免許取得を中心においた短期大学、国立大学に入学し直すこと、通信教育などを利用することなど調べれば調べるほど、選択が難しくなり大学の学生相談所で相談をさせていただきました。相談に乗ってくださった先生は、じっくり考える時間をとることの大切さを示唆してくださいました。その後、立教大学内で転科試験を経て教育学科生になることができることを知り、それが神さまの導きかもしれないと思い始めると目標達成のための準備が落ち着いてできるようになりました。大学2年生になり、在籍していたドイツ語の学習にも引き続き力を入れました。ドイツ語学習の持つ魅力に変化はありませんでした。

幸い教育学科への転科の希望も受け入れられて3年次からは教育学科生として学ぶことになりました。同じ大学内といっても顔見知りの学生がいるわけではなかったのですが、同じドイツ文学科からの転科を希望した同級生がおり、心強かった思い出があります。

教育学科の毎日は2年間で教職課程の単位を全て習得しなければならないので忙しい日々でした。覚悟はできていましたのでいやだと思ったことはありませんでした。上田薫先生、細谷俊夫先生、澤田慶輔先生、浜田陽太郎先生ほか各先生の講義はどれも刺激的でした。一言で言うと常に考えさせられたと言えばいいでしょうか。特に上田先生の道徳授業に関する講義には圧倒されました。今まで道徳に関して私はそれほど考えたことはなかったのですが、先生は「道徳の授業をすることになったら、私は子どもたちの前で一言も語ることはできないであろう。」と語られたのです。転科間もない私に教育学科はどう教えたらいいのかを学ぶところではなく、どう考えたらいいのか、教師がどう学ぶことが大事なのかを考えるところなのだということを早い時期に気づかせていただきました。

4年生となり、卒論は教育社会学的な見方から学校について考えたいと考え、浜田陽太郎先生からご指導を受けることに決めました。相談、熟

考の結果、テーマを「昭和 20 年代の教育実践記録の分析」と定めました。当時は、全員が卒論を提出していたのですが、その方法は二つありました。一つは従来通り論文完成後に一括提出で、もう一つは年に 3，4 回に分けて提出する方式です。3 年次の転科学生としての事態も考慮し、私は後者の方法で行うことにしました。提出回数が多い方が浜田先生からのご指導も多く受けられるのではと考え選択しました。方法としては主として 20 年代の教育記録を精読し、一人の教師の仕事として社会的な関わりの中でどう苦闘しているかを読み取り、これからの教育に資する指導のあり方を探ることが目的でした。

特に社会との関わりの中に学校があり子どもたちがいる、ということを認識したうえで、子どもの視点から生活を変えることができると信じて取り組まれた生活綴り方を中心に指導する教師の姿を追っていくことが大きな視点となっていきました。このことは一つ卒論を仕上げるという目的だけでなく、自らの教師像を練り上げていく時間にもなりました。このときの学びは私が担任として、書くことを大事にし、書かれたものには必ず誠意を持って倍にして応える『倍返し』となって結実したのだと思っています。管理職になってからもとにかく書かれたものには『倍返し』の心がけは続けてきたつもりです。

卒論作成を通して、指導の歩み、子どもの様子を中心に『書く』ことが教師にとって大変重要であり、現場教師の大きな責務であること、それは常に未完の営みとしての学校教育を、よりよいものにしていくために必要であること、を深く学びました。未熟でしたがキリスト教信仰を持って小学校教育に携わろうと考えていた私にとって、このことは実際の指導のための 1 本の柱が得られ大変有益であったと思います。戦後の困難な時代に子どもたちのためにという思いをまっすぐに見据え、努力を続けた先輩教師や恩師との出会いは教育学科時代の忘れられない経験となりました。同時に、困難な中にある子どもたちに寄り添うことこそクリスチャン教師として働きがいがあるように思えて、へき地校などのある公立小学校の教師

としての道を選択しました。

4年生になるとすぐその年の教育実習についてのガイダンスがありました。教会での土曜学校教師としての経験がありましたので、子どもたちとのふれあい方はある程度身についていると思っていました。けれども先生方はプロフェッショナル、どんな先生方との出会いがあるのかと期待と不安でそのときを待っていました。幸い指定された実習校は住まいから都内では最も近い北区となりました。

Ⅲ　小学校教師開始

1　東京都公立小学校教員

(1) 採用試験

東京都の小学校教師採用試験を受験しました。私自身この決断に至るまでにも様々な経緯がありました。当初ドイツ文学科からの転科を考える大きな要因となったへき地教育に関わりたいという思いは常に私の中に生きていました。クリスチャン学生として立教で学ぶ中でその思いがさらに強まっていきました。学校教育の中で比較的に恵まれない状況の中にこそ私の教師としての人生をかけようとの思いをもっていました。それが当時の私にとってはへき地教育に従事するという希望でした。その思いを持ちながらも4年生の教育実習終了後の夏、東京都の教員採用試験を受験しました。しかし、それは都内西部のへき地校や、伊豆諸島の小学校勤務を希望してのことというわけではありませんでした。都内の一般的な小学校勤務を目指して受験したのです。へき地校勤務の希望を持ちながらの受験でした。

この決断をしたのは、教育実習での指導教員A先生の助言があったからです。実習も中盤を迎えると、授業に関すること以外にも少しずつ話をするようになりました。とにかく話を聴いてくださる先生でした。学級会などでの子どもたちの話し合いもにこにこしながら聴いている時間がほとんどで、だからこそ子どもたちも安心して意見を発表し合える学級になっていました。そんな先生だからこそ、ある日へき地教育への思いを伝えまし

た。学生の思いつきと思われても仕方のない状況であったにもかかわらず、先生は私の話をしっかりと受け止めてくださいました。そして、「わかりました。では、卒業後はまず一般の学校の教師として働くことを勧めます。学習指導、生活指導、事務の処理、学校を支える人々との出会い、その他諸々の基本をそこで学んで、思いが変わらないならば行動したらどうでしょう。」そう応えてくださいました。思いがあったとしても、いわゆるへき地、小規模校に大学卒業したばかりの新卒教師が飛び込むことに対して冷静に一人のプロ教師としてアドバイスしてくださいました。私はそれがへき地教育に携わることを応援しての助言ではなかったかと受け止めました。そして、私も学校教育を担う教師の修行は最も基本的な現場からのスタートが大切であると考えるようになりました。A先生の言葉は神さまからの声のように思え、東京都の採用試験を受験し一般的な公立小学校の教師となることを目指すことにしました。

卒業間近のある日、北区からの連絡があり、指定された日時に区役所に出かけました。赴任地が北区になったことを大変うれしく思いました。次年度の採用者が集まった中で、一人ひとり辞令が読み上げられました。私への辞令は教育実習をさせていただいたN小学校勤務でした。驚きと喜びは尋常ではありませんでした。その後、N小学校に事前の挨拶と打ち合わせのために出かけました。挨拶後の事務連絡となり校長先生との話の中で担当学年は新5年生、学年主任はA先生と告げられました。教育実習の指導担当であった先生が学年主任となりまた指導いただけるとは夢のような気持ちでした。これら全ては私の努力や準備とは全く関係なく、たくさんの人の手を通して決定された神さまの導きであると感謝の思いをかみしめました。

(2) N小学校着任

わずか1ヶ月にも満たない短い時間ではありましたが教育実習生として子どもたちと学んでいた学校勤務には大きな安心感がありました。初めて

受け持った5年生の子どもたちも、どこかでその記憶が残っているのか初日から特別な違和感もなく学級生活を始めることができました。先生方も若干の異動はありましたが、ほとんど私のことを知っていてくださる方々で、教師1年生として必要以上の緊張感を持って過ごすことはありませんでした。それぞれの教科などで指導上分からないことがあるとまず学年の先生、また、各教科の研究をされている先生方に教えを請うことができたことも大変幸せなことでした。『わからない、といえる職員室の中にいられることは教師にとって大変重要なことである』と後に学校経営に携わるようになってからは常に強調し続けてきました。それは私の初任者時代の経験が土台にあったから言えることです。

学校の教師の主なる仕事は授業における学習指導ということは昔も今も変わりはありません。校務を分掌しそれぞれが役割を分担しながら責任を持ち、教科以外の様々な分野での仕事の経験、得意分野を見つけ専門性を高めることも教師の仕事の醍醐味と言えるものです。私は、大学生時代から写真を趣味として自ら現像、引き伸ばし、焼き付けなどをしていましたので、まずは写真部を創設しその担当教員となりました。また、中学時代から趣味で真空管ラジオを作ったりアマチュア無線も行ったりしていたことで、視聴覚教育担当、合わせて北区視聴覚指導員の仕事を任されました。北区は当時視聴覚教育の進んだ区として認められていました。その中で私が他校にも出張し伝えていった技術はオープンリールのテープデッキ2台を同時に使い、テープを2台にまたぐようにかけ、1台のテープデッキとカメラで録画したテープをすぐに2台目のデッキで再生できるようにするシステムを広めるといったものでした。主に体育の器械運動での動きを子どもが自分で確認できる利点があり、授業での活用を促すものでした。今から考えると隔世の感があります。

担任の仕事としては4学級あった学年で学年主任のA先生ともう二人の先生方から日々指導を受けながら進めていきました。学習の進度の違いは一番気を遣いました。週末に教科の進度を報告し合い、次週の進度の調

整を行いながら、学級による大きな違いを防ぐようにしていました。公立学校においては子どもの転校や転入は予測できません。そのために、教科書会社の単元配置に合わせた進度を合わせる必要があるとの考え方が一般的でした。残念ながら各教師の主体的な判断で学級の子どもたちの実態にあった学びを作り上げていくという考え方はなかなか生まれにくい状況でした。ですがその中でも、学年の教師間の話し合いで、学年の重点単元に学習時間を多めに割くといった変更は行うことができました。毎日がプロ教師になって初めての一日といった1975年度はこうして過ぎていきました。学級として取り組みたかった生活綴り方にはなかなか手が回らず、とりあえず書くことを大切にした日記指導に終始していました。十分ではありませんでしたが日記やノートなどの子どもたちの表現に対しては、『倍返し』で応えるように心がけていました。

次の年度は5年担任4名がそのまま6年担任となりました。6年生は学校の顔とよくいわれますが、担任にとってはある種の重圧を感じる学年です。私もきっとそうだったのでしょう。そして、経験の浅い担任の焦りは、余裕のない生活に子どもたちを追い込むこととなり、心が乾いていくような感覚を子どもたちに持たせてしまったのではないかと思っています。女子のグループ化が進み、互いに協力して学級を作り上げようという雰囲気が5年の時よりも後退してしまいました。指導技術も未熟な2年目の教師にとって、このような状況の打開策は最も有効性のない言葉での訴え、説教だけでした。毎日朝の学級の時間を越えて話をし続けることしかできませんでした。私が教師として最もしたくないと思っていたことをしてしまった挫折感は小さなものではありませんでした。A先生にも相談したところ、「私もそのような学級になってしまったことがあります。」と状況を理解してくださいました。しかし、そのための解決策の伝授はありませんでした。今にして思えば全ての学級は唯一無二の性格を持つという考えから、あえて控えてくださったのでしょう。それからしばらくして、数人の女子から先生の言おうとしていることが分かりました、と言われその後大

きな問題が起きることはありませんでした。どうして、この子たちがそう言ってくれたのかは分かりません。私との学級での共同生活や、普段の話からそう思ってくれたのかもしれません。ひょっとするとA先生始め、他の二人の学年の先生方が経験を生かして私の学級の女子に話をしてくれたのかもしれません。もちろんどなたも私にそれに関する話はされませんでした。ただ、「まとまってきてよかったですね。」と学年会で声をかけてくださっただけです。教師一人の力はほんのわずかなものです。私が学校経営をする立場になったときから「学校の先生方で学校の子どもたち全ての担任となりましょう。」と言い続けているのはあの時の経験からです。『教師同士の協同があってこそ初めて子どもの協同性が育つ』ことを私はこの学校で学びました。

（立教小学校校長・JICE所員）